

漆植栽を5年ぶりに再開 ～奥州市前沢区 生母生産森林組合の取組～

1 はじめに

奥州市前沢区の生母生産森林組合(那須川吉春組合長。組合員534名。以下「組合」という。)では、ふる里の山を漆の産地とする取組を行っています。

今回、5年ぶりに漆植栽を行いました。

2 漆植栽の経緯

漆は、秀衡塗などの漆器や岩谷堂箆笥、南部鉄器にも利用されています。

県南地域もかつては、漆栽培が盛んでありましたが、産業構造の変化により姿を消しました。

組合では、平泉の黄金文化を支えた漆の再興を目的に、二戸市浄法寺町の漆生産組合や森林組合の指導を受けながら、平成22年に面積1.68ha(植栽本数2,700本)の植栽を行いました。5年経過した現在の生育も順調となっています。



【植栽後5年経過した漆の生育】

3 漆植栽の5年ぶりの再開

組合では、平成22年の植栽後も、次の植栽に向けた準備を進めていました。

漆植栽は日当たりのいい、肥沃な土地が適地

であるため、条件に合った候補地を選定していました。

植栽にあたっては、浄安森林組合職員の指導を受け、候補地を2カ所とし、うち1箇所(新田地区)については、粘土質の土壌であり、今後の生育状況を見るため、試行的に0.1haの植栽とし、もう1箇所(峠地区)には0.9haを植栽することに決定しました。

4 植栽作業

地拵えについては、一部前生樹の伐採が伴ったため、地元森林組合に委託しましたが、植栽作業は、去る11月15日に、あいにくの雨の中でしたが、組合員13名による出役で千本の苗木を植栽しました。



【新田地区での植栽作業】



【峠地区での植栽作業】

5 おわりに

文化庁では、今年2月に国宝や重要文化財の建造物の修繕の際には、国産漆の使用を原則化することとしました。

漆の需要は、今後も寺社の修復等での増大が期待されます。組合では、当面、目標である5haの植栽を実施し、将来的には、漆掻き職人の養成を視野に入れ、取組みを進めることとしています。